

このような現象を説明する実態として、最も適切なものは、当該期の土器製作が住居毎に行われていたと考える事である。つまり、土器製作が集落内特定個人に依拠した上で、集落内に供給されているものではなく、同様に、製作工程と製作物の実体像を共有する特定の制作者集団に依拠しているわけでもない点である。

更に、型式論的諸属性が一軒の住居跡出土遺物の、台付甕の中で概ね一致しながらも、なおかつ調整の細

部では異なっている点から、少なくとも台付甕に関する限り、高度な規格性が保てるほどには、製作過程が洗練されていない事も予想される。

なお、器台や高壙などの小型から中型の土器については、住居跡内においても、台付甕ほどのまとまりは見られない。今後検討を進めて行くためには、文様のない土器の諸属性を型式論的に拾い上げ、比較検討する事が必要である。

(大屋道則)

4. 稲荷台遺跡古墳時代前期集落について

稻荷台遺跡の古墳時代前期集落跡は、上尾市稻荷台遺跡調査会による1977年調査、当事業団による1990・91年調査（A～C区）、そして今回報告分の1998年調査（D区）を経て、その姿が徐々に明らかになってきた。この機会に、D区に加え過去の調査にかかる成果を視野に含め、稻荷台集落の展開について現状での分析を試みたい。

集落構成について

これまでの調査範囲は大きく南北に分かれ、地形を考慮すれば、それぞれ遺跡の南限と北限を捉えているといえる。竪穴住居跡はその両端で密な分布を示しており、台地中央部分の状況は不明なもの、南北300mにわたり住居跡が連なる大規模集落跡の姿を垣間見ることができる。また、南に位置する薬師耕地前遺跡は、稻荷台集落の墓域である可能性が高い（第82図・註1）。

検出された竪穴住居跡（以下、「住居」と表記）の周壁平面形は、大小を別に、概略的には長方形基調と正方形基調に分けられる。それぞれコーナー部にやや丸みを残すものが主となる。柱穴は4本が整然と配置されるものの他、規模の大小に寄らず4本そろわない例も少なくない。炉は4辺いずれかの壁面中央付近に寄り、少数だが中央付近やコーナー付近に位置するものもある。いずれも地床炉とみられる。小型住居では確認されない例もある。貯蔵穴とみられるピットは、炉が寄る壁面の対面、炉に向って右コーナー寄りに位

置する。中心軸方向は、これら屋内施設の配置から推定される。

周壁平面形と中心軸を基準に、稻荷台遺跡で検出された住居の平面形態は、概ね次の型に分類される（第83図下左）。

A 1型：周壁平面形は長方形基調。炉と貯蔵穴が短辺に寄り、中心軸が長辺に平行する。すなわち奥行きが幅より大きい。

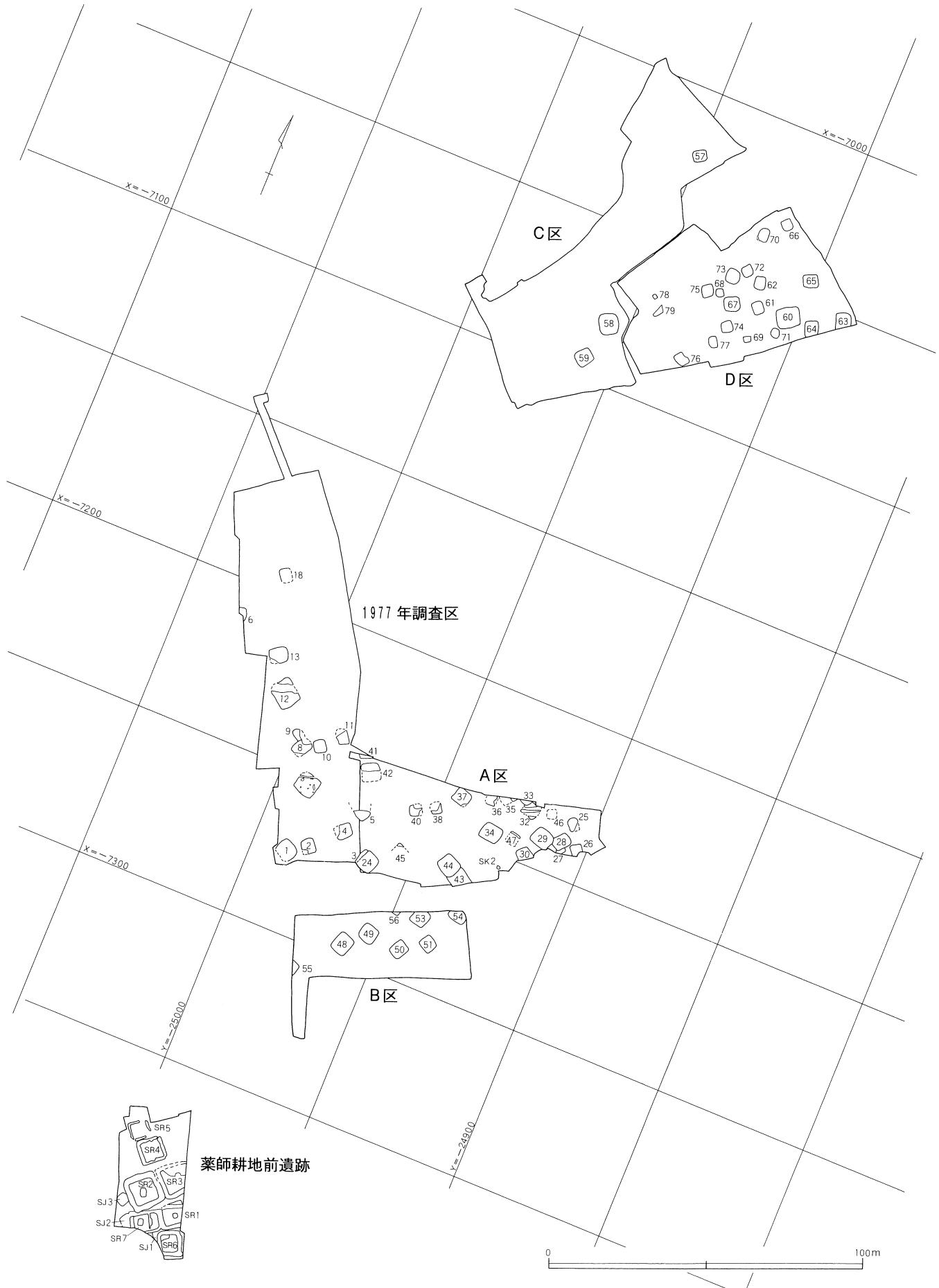
A 2型：周壁平面形は長方形基調。炉と貯蔵穴が長辺に寄り、中心軸が短辺に平行する。すなわち幅が奥行きより大きい。

B型：周壁平面形が正方形基調のもの。屋内施設の有無、配置によって細分可能だが、ここでは一括しておく。中心軸方向を確定できないものも多い。

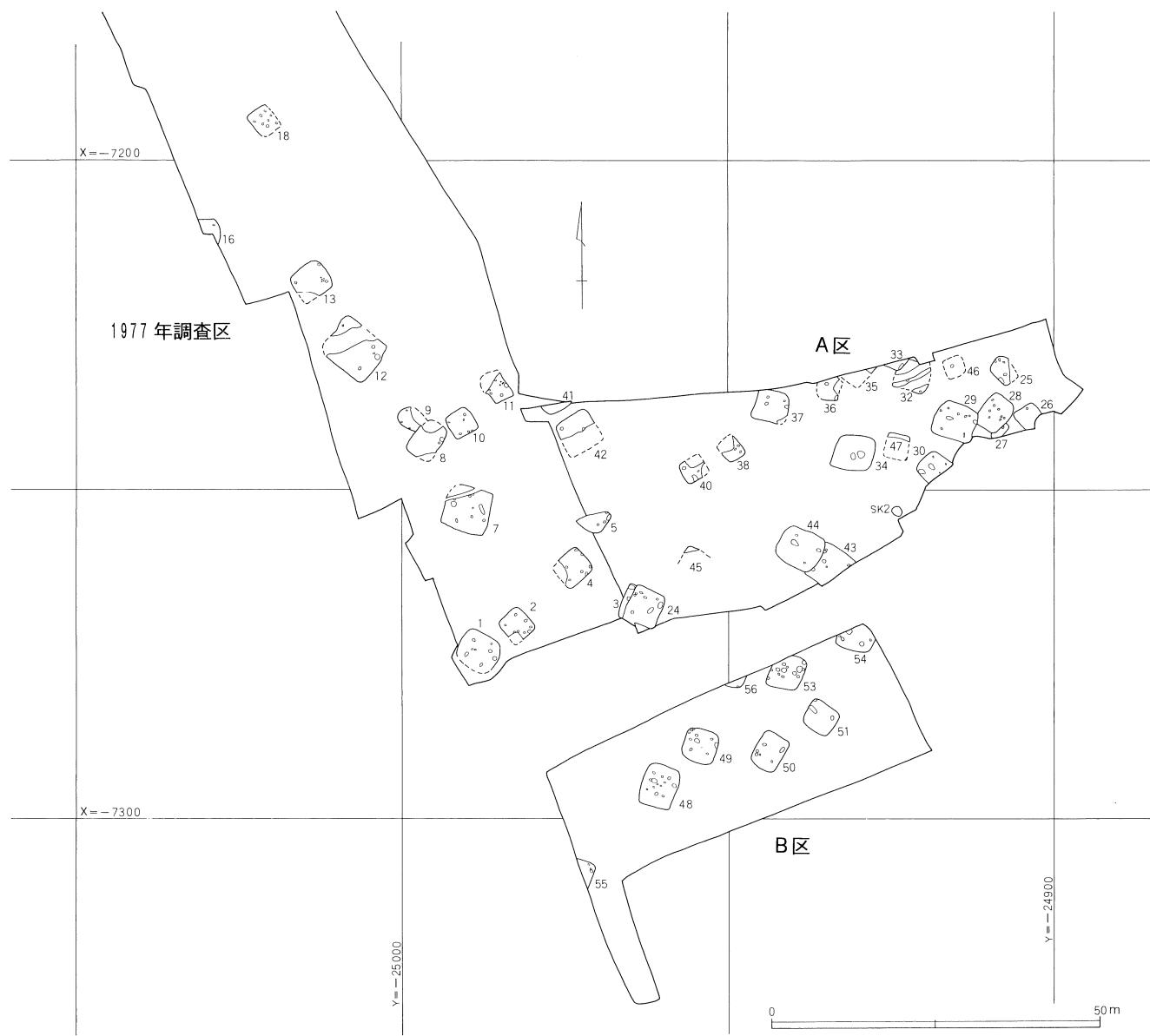
床面積をもとに平面規模の分布をみると（第84図下右・註2）、最小はSJ68で5.2m²、最大はSJ12で47.5m²である（註3）。10～25m²のものが主体となり、10～15m²の小型住居が突出している。ピークは4箇所に現れ、それぞれを中心に小（10～15m²）、中（20m²前後）、大（30m²前後）、最大（40m²以上）の4階級を認めることができる。無論、集落は完掘されておらず、より大型の住居が存在する可能性は残されている。

A 1型は規模の大小にわたり認められ、相対的に大型の住居では主体となる。40m²を越える2軒はいずれもA 1型である。A 2型は中・小型住居に分かれる。B型は小型住居に多いが、SJ 7・32・34のように30

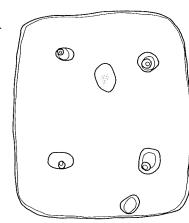
第82図 稲荷台遺跡全体図



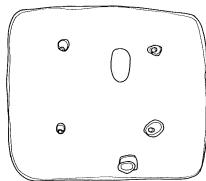
第83図 遺構分布詳細図(1)



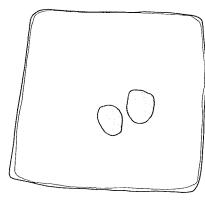
住居の型



A1

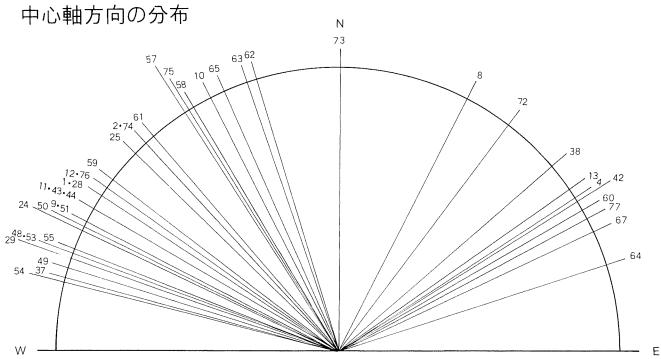


A2



B

中心軸方向の分布



第84図 遺構分布詳細図(2)

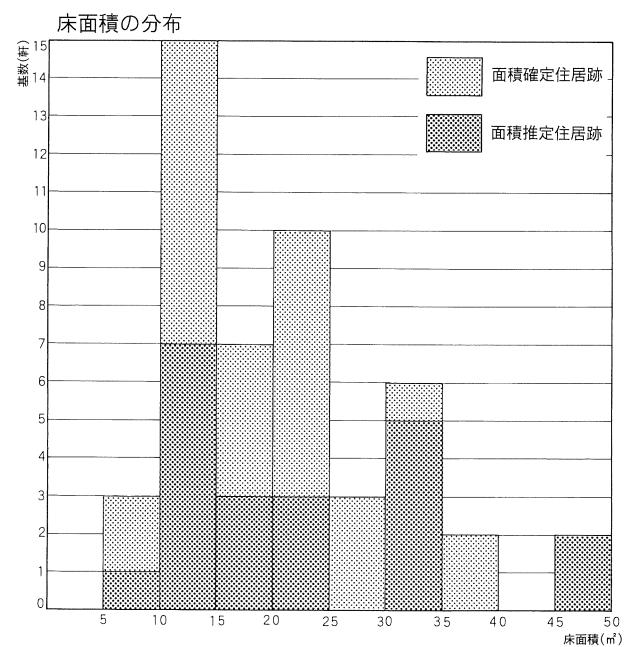
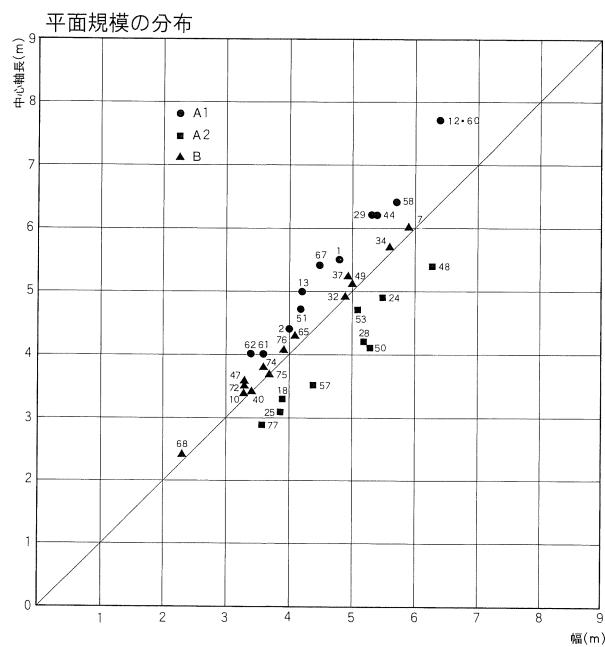
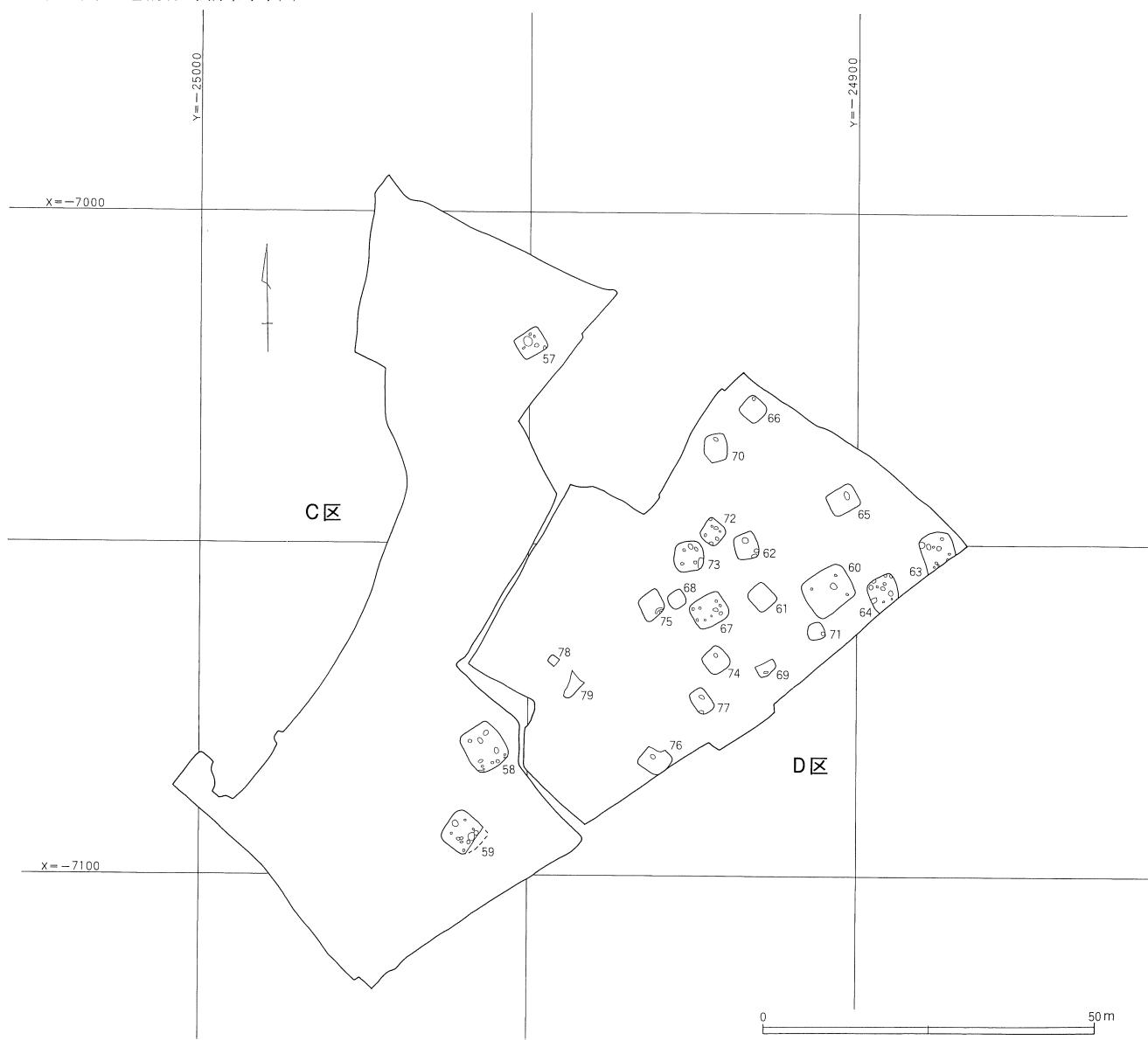


表3 住居属性一覧

遺構番号	型	軸長×幅 (m)	床面積 (m ²)	中心軸方向	屋内遺構		遺構番号	型	軸長×幅 (m)	床面積 (m ²)	中心軸方向	屋内遺構	
					炉	貯蔵穴						炉	貯蔵穴
1	A1	5.5×4.8	(25)	N-57° -W	○	○	46	—	—	—	—	○	—
2	A1	4.4×4.0	(16)	N-43° -W	○	○	47	B	3.5×3.3	11.5	—	—	—
3	—	—	—	—	—	—	48	A2	5.4×6.3	32.5	N-71° -W	○	○
4	A2?	(4.0×—)	(19)	N-57° -E	○	—	49	B	5.1×5.0	23.8	N-73° -W	○	○
5	—	(3.9×—)	—	—	—	—	50	A2	4.1×5.3	20.5	N-64° -W	○	○
7	B	6.0×5.9	(35)	—	×	×	51	A1	4.7×4.2	18.9	N-63° -W	○	○
8	A1	(—×4.0)	(20)	N-27° -E	○	○	53	A2	4.7×5.1	(23)	N-71° -W	○	○
9	—	—	—	N-63° -W	—	—	54	A1?	(5.4×—)	—	N-76° -W	○	○
10	B	3.4×3.3	10.9	N-27° -W	○	○	55	—	—	—	(N-69° -W)	—	○
11	A2?	(3.1×—)	—	N-60° -W	○	○	56	—	—	—	—	—	—
12	A1	7.7×6.4	47.5	N-55° -W	—	○	57	A2	3.5×4.4	15.0	(N-33° -W)	○	×
13	A1	5.0×4.2	(20)	(N-55° -E)	○	—	58	A1	6.4×5.7	33.5	N-31° -W	○	○
16	—	—	—	—	○	—	59	A2?	(—×5.3)	(26)	N-53° -W	○	○
18	A2?	3.9×3.3	(12)	—	×	×	60	A1	7.7×6.4	45.3	N-60° -E	○	—
24	A2	4.9×5.5	(26)	N-65° -W	○	○	61	A1	4.0×3.6	13.2	N-41° -W	○	○
25	A2?	3.1×3.9	(12)	N-46° -W	○	○	62	A1	4.0×3.4	12.6	N-17° -W	○	○
26	A2?	(3.9×—)	—	—	○	—	63	A1?	(4.4×—)	—	N-19° -W	○	○
27	B?	—	(8)	—	—	—	64	A2	—	(20)	N-72° -E	○	○
28	A2	4.2×5.2	(21)	N-57° -W	○	×	65	B	4.3×4.1	16.6	(N-24° -W)	○	×
29	A1	6.2×5.3	30.2	N-70° -W	○	○	66	B	(3.4×—)	(11)	—	×	○
30	—	(4.6×—)	—	—	○	○	67	A1	5.4×4.5	21.8	N-65° -E	○	○
32	B	4.9×4.8	(23)	—	○	○	68	B	2.4×2.3	5.2	—	×	—
33	—	—	—	—	○	—	69	—	(2.5×—)	—	—	○	—
34	B	5.7×5.6	31.6	—	○	×	70	—	(4.1×—)	(15)	—	○	×
35	—	—	—	—	×	×	71	—	(2.7×—)	(7)	—	○	×
36	B	(3.1×—)	(10)	—	○	○	72	B	3.4×3.3	10.8	N-37° -E	○	○
37	B	5.2×4.9	(24)	N-75° -W	○	○	73	B?	(4.8×4.5)	(19)	N-0° -E	○	○
38	A2	(3.1×—)	(11)	N-49° -E	○	○	74	B	3.8×3.6	12.3	N-43° -W	○	×
40	B	3.4×3.4	(12)	—	—	○	75	B	3.7×3.7	12.8	N-32° -W	×	○
41	—	—	—	—	—	—	76	B	4.1×3.9	(16)	(N-55° -W)	○	×
42	A2?	(5.8×—)	(33)	(N-58° -E)	○	—	77	A2?	2.9×3.6	(10)	N-62° -E	○	○
43	A1	(—×5.6)	(36)	N-60° -W	○	—	78	—	—	—	—	—	—
44	A1	6.2×5.4	31.6	N-60° -W	○	○	79	—	—	—	—	—	—
45	—	—	—	—	—	—							

m²を越える一群がある（第84図下左）。

床面は、貼床の有無と掘り方の形状によって分類が可能だが、資料が充分でなく状況は不明瞭である。構造不明なものも多いが、敢えて大まかに状況を整理しておく。以下の例がある。

①素掘りのもの（貼床なし）：SJ32・34

②中央を高く残し、周囲を掘り窪めるもの：

SJ24・25・29・37・43・44

③中央と壁際を高く残し、その間を掘り窪めるもの：SJ30・49～53

④壁際を高く残し、中央にかけて内側を掘り窪めるもの：SJ63・64・74

⑤その他、中央もしくは周囲の一部を掘り窪めるもの：SJ26・36・38・40

⑥平坦な掘り方で全面に貼床するもの：SJ58

なお、②～⑤については、貼床が全面に及ぶ場合と

高まり部分がむき出しになる場合がありうるが、ここでは区別していない。

1977年調査区については不明であるが、以上の分布状況を確認すると、A区は①～③、⑤が混在し、B区は③が多く、C区は⑥、D区は貼床不明瞭とされるものが多い中④が確認されている。空間的なまとまりがおぼろげながらうかがえる。

中心軸方向は、知りうる限りでは北西指向が優勢である（第83図下右）。B区とA・1977年調査区南辺部では、西～北西に集中する傾向が顕著で（SJ1・11・12・28・29・43・44・SJ48～55）、C区とD区の一部の住居は北西～北を指向する（SJ57・61～63・65・74・75）。一方D区では東～北東指向もまとまりをもっており（SJ60・64・67・77）、A・1977年調査区にも少数存在する。

焼失住居と報告されたものはSJ1・12・48・55・60・62・66・67・72・75の10軒で、他にSJ30で可能性が認められている。総件数に対して割合は高くなないが、D区の6軒（SJ60・62・66・67・72・75）は、分布がまとまりつつ重複せず、その配置からは同時被火災住居群である可能性がうかがえる。1977年調査区とA区にかけて分布する3軒（SJ1・48・55）も、分布範囲からは单一の群としてのまとまりは否定しきれない。最大のSJ12はそれらに対しやや孤立的位置を占める。

遺構の重複は、計画的拡張と見られる1例を含め6例ある。新旧関係は次のとおりである。

- ・SJ3（古）-SJ24（新）
- ・SJ9（古）-SJ8（新）
- ・SJ27（古）-SJ28（中）-SJ29（新）
- ・SJ33（古）-SJ32（新）
- ・SJ44（古）-SJ43（新）
- ・SJ32a（古）-同b（新）（拡張）

ところでB区48・49・51・53では、南東コーナー付近の床面上に小礫の集中が認められた。貯蔵穴と付近のコーナー部の間に小礫が集中する事例は、大宮台地では弥生時代後期の住居でもしばしば報告されてい

る。屋内祭祀等何らかの目的にかかる施設とみられるが、弥生時代以来の伝統的行為が、古墳時代前期の稻荷台集落にも引き継がれていたといえる（註4）。

D区出土土器について

稻荷台遺跡出土の古式土師器については、既にA～C区を報告した書上元博により分類が行われている（書上1994）。周辺の同時期資料を見渡し、より包括的な分類編成の中に稻荷台集落の土器を位置付ける課題は残されていると思われるが、ここでそれに挑む準備はできていない。また単一遺跡に視野を限って新たな分類を行うことは、いらぬ混乱を招くだけで不毛だろう。

よって、ここでは必要に応じ書上分類を援用して状況を記述するに留め、分類については曖昧な姿勢に終始することを許されたい。

他日を期して新分類に臨むつもりである。

I. 壺類

＜壺＞後期弥生土器以来の折返し口縁は、端部の粘土帯が幅広になる一方、同じく複合口縁は粘土帯の立ち上がりがあいまいになり、両者の違いは必ずしも明瞭でない（註5）。折返し口縁壺は各区を通じて少ない。D区ではSJ62-6、大型のSJ72-10がある。後者の折返し部分は幅狭く、シャープな端面をもつ。掲載図では側面の凹部が強調されたため沈線をもつか、突縁を重ねるようにも見えるが、平坦な凹面である。口縁部が胴部に先んじて無文化している点、やや内湾気味に立ち上がる点に注目すれば、在來的な折返し口縁壺としては異質である。内湾折返し口縁をもつ例として、庄和町尾ヶ崎遺跡SJ K10-1、蓮田市ささら遺跡SJ19-1などがある。

複合口縁壺は、SJ75-7がある。縄文と赤彩による伝統的装飾壺の系譜上にある。入念なつくりではあるが、複合部がほとんど起き上がらず、頸部からほぼ直線的に開く点、弥生土器の複合口縁に通有な棒状浮文を欠く点ではむしろ折返し口縁壺に近い。SJ43-1、SJ38-1のように、棒状浮文列が全周する例は

ない。

単純口縁壺は、屈曲する頸部から口縁部が直線的に立ち上がる SJ72-1、SJ76-1、く字状の頸部から外反する SJ75-6、同じく内湾する SJ65-4、SJ77-1 がある。壺 2 D にあたる SJ65-4、SJ77-1 は器壁の薄い精製品で、東海地方西部の内湾口縁壺に関連するものである。口縁部の形状は不明だが、頸部に断面三角形の突帯が廻る SJ77-4 も同様だろう。

SJ67-2 は、いわゆる「パレス壺」である。床上 2 cm から出土した破片資料で、SJ77 出土の破片と接合した。後者の出土状況は不明である。内湾気味の口縁部内面に断面三角形の突帯が巡り、口縁端部との間には、摩滅がひどく詳細不明だが羽状刺突文が配される。視覚的印象だが、乳白色できめの細かい胎土からみて在地産でないことは確実だろう。東海地方西部産の搬入品である可能性が高い。口縁部のみだが、浅井和宏分類 F 類（浅井1986）に相当する。元屋敷式期古段階、廻間編年廻間 II 式期（赤塚1990）の所産とみておきたい。

＜小型壺＞口径 10cm・器高 15cm 未満の壺である（註 6）。折返し口縁の SJ60-1 は、口縁部直下に 2 個 1 組の小孔をもつ。ほかに単純口縁の SJ75-4、SJ67-1、口縁部が短くつくりが雑な SJ68-1、口縁部を欠く SJ62-5 がある。

＜広口壺＞折返し口縁の SJ67-1 は、後期弥生土器以来の系譜上にある。下加南遺跡 SJ 7-5 は柱状脚高杯とともに出土しており、古墳時代前期にかけて連綿と続く形式である。単純口縁の SJ65-12 は、扁球状の胴部に注目すれば岩槻市木曾良遺跡環濠-15 に関連が見出せる。口縁部を欠く SJ62-8、SJ65-11 も扁球状の胴部である。やはり単純口縁の SJ72-5 は、成形、調整ともにシャープで、く字口縁の平底甕に通じる。平底甕主体地域との関連を確認する必要があるだろう。

2. 甕 類

＜甕＞台付甕が主体であり、平底甕の確実な例は見

あたらない。口縁端部にキザミメをもつ例として SJ62-3・4 があるが全体では少ない。頸部はく字状屈折に近いものが多いが、内面に鋭角的な稜をもつものは少ない。SJ75-10・11 のように、緩やかに屈曲する例もある。器形、調整は、全体的傾向よりむしろ住居単位に個性が認められ、SJ75 では口縁部にかけてハケメ仕上げで、球形胴とイチジク形胴が共存する。SJ72-7・8 では胴部ハケメ・口縁部ナデ仕上げである。際立っているのは SJ65-13~16 で、整形工程の境界とみられる胴部下位に稜をもち、底部が脣状に突出して脚部と接合するため、脚上部に中実なくびれ部ができる。そして外面ナデ仕上げである。岩槻市諏訪山遺跡 SJ 8・9 などが近いように見えるが、接合部のみ注目すれば尾ヶ崎遺跡 SJ K 10-19・20、大宮市吉野原遺跡 SJ15-10 などに類似の特徴を見出せる。いずれにしても SJ65 の個性にとどまるものではないだろう。

SJ77-5 は胴部の膨らみが少なく、やや長胴になるとみられる。

＜小型甕＞器高 10cm 前後の台付甕で、SJ75-5 がある。遺跡内の類例としては SJ 1-1、SJ38-4 があるが、本例は台付甕の相似形といえる。法量からみて甕本来の用途とは別の存在意義を認めるべきだろう。SJ38-4、尾ヶ崎遺跡 SJ K 6-2 が赤彩されていることからも、祭祀に関連するとみられる。

3. 高杯類

＜高杯＞記述にあたっては、書上分類に従い、その名称を用いる。以下のとおりである。

1 A : 杯部下端に明瞭な段をもつ（有稜高杯）

1 B : 杯類下部に微かな段をもつ

1 C : 杯部内湾気味に開き、段をもたない

1 D : 半球状の深い杯部をもつ

また報文からは、高杯類と器台類脚部の透孔について正確な個数が読み取れない。ここで補足しておく。

透孔 3 個 : SJ74-3

透孔 4 個 : SJ65-8、SJ68-2

1 A は SJ65-9 がある。つくりはやや雑だが、杯

部の稜は明確で、脚部は下半が大きく開き、元屋敷式系高杯としては、廻間7期前後の様相をうかがうことができる。なお本例も杯・脚接合部付近に中実な括れ部があり、先述した一括出土の台付甕に共通する成形である。

1 B は SJ74-5、1 C は SJ62-2 がある。1 D と判別できるものは出土していない。

＜開脚高杯＞従来「小型高杯」と呼称されてきた、脚部底径が杯部口径を凌ぐ小型低脚の高杯を、加納俊介の分類に従い「開脚高杯」とする（加納1999）。小型精製土器群に含まれ、近畿あるいは東海地方西部との関連が問題視される器種である。

D 区では、僅かに SJ64-1 にその可能性がある。

＜低脚高杯＞開脚高杯に対し、杯部口径が脚部底径を上回る小型低脚の高杯である。やはり加納分類による。山陰地方東部の「低脚杯形土器」との類似が指摘されている SJ34-1 が好例となる。

D 区では、脚部のみの SJ74-6 がある。裾部を肥厚させ、その上端にキザミメを施す意匠は、東京湾沿岸地域の後期弥生土器の高杯脚部に連なるものだろう。大宮市三崎台遺跡 SJ19-9 は縄文が施され、より本來的な装飾を留めている。

4. 器台類

＜小型器台＞書上分類に従い、その名称を用いる。以下のとおりである。

1 A : 内湾する深い器受部をもつ

1 B : 内湾気味に開く浅い皿状の器受部をもつ

1 C : 直線的に開く漏斗状の器受部をもつ

1 D : 漏斗状に開いた後、口縁先端が緩い段をもつてやや立ち上がる器受部をもつ

1 E : 下端に稜をもって立ち上がる器受部をもつ

1 F : 下端に稜をもって外反する器受部をもつ

1 G : 横に開き、段をもって外反する器受部をもつ
高杯類同様、透孔の個数を補足しておく。

透孔なし : SJ60-3

透孔1個 : SJ64-4

透孔3個 : SJ61-3、SJ62-1、SJ68-4

透孔4個 : SJ65-6・7、SJ68-4

なお SJ64-4 は、透孔が貫通していない。凹部中央が突出し、竹管状工具による刺突の状況をよく残している。

D 区では、1 A は SJ65-5・7、1 B は SJ65-6、SJ61-3、SJ64-4、1 C は SJ60-2・3、1 E は SJ62-1、SJ72-2 の例がある。1 F、1 G は出土していない。

SJ62-1 は受部端面のつくりが丁寧で、受部を縁取る面が強調される側面観を意識した仕上げである。端面下端には沈線が巡っており、下辺の輪郭を浮き立たせている。野田市三ツ堀遺跡 SJ 1 例など、端面を上下に拡張し、壺口縁のごとく装飾する型式に連なるものとみなしたい。遡れば東海地方西部の器台に関連が求められるだろう。

赤彩とミガキによって丁寧に仕上げられたものが多い中で、SJ60-2・3 は脚部に繊細なハケメを残し、受・脚部は穿孔されない。

＜装飾器台＞SJ55-6 が好例であるが、D 区では出土していない。

5. 鉢 類

＜鉢＞書上分類に従い、その名称を用いる。

A : 最大径を口縁部にもつ浅鉢

B : やや膨らむ胴部と短く開く口縁部をもつ深鉢

C : 逆台形の胴部をもつ小型鉢。手捏ね成形のものも含まれる。

A は SJ75-1、SJ65-2、B は SJ75-2、C は SJ74-1、SJ79-1 がある。他に、B の胴部で口縁部が開かない SJ60-4 などがある。

＜小型丸底鉢＞SJ65-1 がある。遺跡内では確実な例の初見だろう。小さな扁球状の胴部から口縁部は大きく開き、口径は器高の 2 倍に達する。焼成は良好だが調整は荒く、精製土器としての意識は認められない。

6. 甌 類

＜甌＞D 区では出土していない。

7. 小型土器類

筒型の胴部に短い口縁部をもつ SJ72-1 がある。

小型壺 SJ29-3、SJ44-6のミニチュアといえる。類例に SJ13-1がある。

集落の展開と編年的位置付け

これまで見てきた遺構と遺物の様相をふまえ、土器編年案をにらみつつ、稻荷台集落の展開を整理してみたい。

まず、既に提示されている書上編年の内容を確認しておく。書上は、日本考古学協会1993年度新潟大会シンポジウム「東日本における古墳出現過程の再検討」における編年案（日本考古学協会新潟大会実行委員会1993）に基づき以下の3段階区分を設定し、そこへ稻荷台集落出土土器を位置づけた（書上1994）。

第1段階：土器組成への小型器台型土器の参入に象徴される段階。布留0式以前。（前）；廻間II式前半（1・2）段階併行、（中）；廻間III式後半（3・4）段階併行（後）；廻間III式前半（1・2）段階併行

第2段階：畿内系の定型化した小型丸底壺・小型丸底鉢の参入に象徴される段階。布留1式併行。

第3段階：「柱状脚部高杯」、「無透孔屈折脚高杯」等と呼ばれる高杯の参入に象徴される段階。

具体的な言及としては、SJ58出土土器には、廻間II式3段階～III式1段階にあたる搬入品とみられる元屋敷式系有稜高杯が含まれることから、SJ58床面出土土器を第1段階（中）ないし（後）に、一方SJ7では高杯の柱状脚が出土していることから、第3段階に降る可能性が指摘された。その間に連なり、SJ10・11・18・28・33は器台1Fから第1段階（後）に、SJ48は、器台1Gと長胴の甕から第2段階に位置づけられた。そして「稻荷台遺跡の集落は第1段階の（中）～（後）の土器群を伴う住居を中心とするが、第2段階にも継続して営まれていた可能性が大きく、また、第7号住居跡のように柱状脚部高杯を持つ第3段階に近いと思われるものも存在する」と結論づけた。

個々の遺物の位置づけについては若干の異論を抱いているが、この展開の流れは、D区資料が追加された今回にあっても基本的には変わらないと思われる。もっとも、第1段階（中）・（後）から第2段階に至る

連なりを階梯として整理することは容易とは思えないが、ともあれこの間、集落は中絶を挟まず連続的に展開したように見える。

まず最古段階だが、搬入品とみられる有稜高杯を根拠とする SJ58出土土器の位置づけは動かないだろう。在来的な弥生高杯の系譜に連なる高杯が出土した SJ59とともに、あらためてC区住居群を稻荷台集落の最古段階に位置づけたい。

それらに継続するとみられるのはD区の被火災住居群（SJ60・62・66・67・72・75）である。やや孤立的な SJ66はさておき、少なくとも残る5軒は、その配置からみて同時焼失した住居群である可能性が高い。これらは単位集団に対応するとみられ、以下、この遺構単位を単位住居群と呼ぶ（石坂1993・1999）。同時被火災住居から単位住居群の住居配列が良好に見出された例として、富士宮市月の輪平遺跡における分析（渡井・加納1982）がある。また、大宮台地地域では、上尾市尾山台遺跡など、被火災住居が大規模に分布する例が知られている（第85図）。被火災住居群即同時被火災と安直に決め付けることはできないが、同時被火災住居群の把握は、集落を構成する単位住居群の具体的あり方を析出する有効な手がかりである。ところで本例の場合、径40mほどの範囲の中で、大型の SJ60がやや離れた位置に在り、それと中心軸方向を同じにする中型の SJ67を取り巻いて小型住居（SJ62・72・75）が分布する状況は、単位住居群の具体像を示しているといえるだろう。調査区限界に寄った SJ66が別の群に属するとすれば、SJ60を中心に、より大きな群が展開した可能性も残されている。出土土器については、稻荷台集落にあって積極的に新しいと見るべき要素は認められない。第1段階の中に位置づけておきたい。小片ではあるが、搬入品とみられるバレス壺が出土している点も、C区住居群との関連をうかがわせる。

1977年調査区からB区にかけても被火災住居は分布する。それらのうち相互に近接する SJ48・55は、やはり同一単位住居群の一部だろう。SJ1がこれに

加わる可能性もある。ところで、SJ48出土土器群を、器台と長胴の甕から第2段階の代表的存在とみなすことはできるだろうか。SJ48の甕は、より以前から存在する長胴甕の系譜にのるもので、型式としての新相を示すものではないと思われる。器台 SJ48-16・17 にしても、1G類として括られた他遺跡の諸例とは別ける必要を感じる。結論的にいえば、SJ48出土土器群に第1段階に溯る可能性を認め、これら被火災住居群を、D区被火災住居群に連なるか略同時期とみる。

再びD区にもどる。D区では、被火災住居群を除いた住居群を被火災住居群の後に位置づける。件数は倍増し、複数の単位住居群で構成されるとみられるが、分布は均等で、強調するつもりはないが同時存在も物理的には不可能ではない。中・小型住居のみである点から、SJ60に対応する大型住居の存在をD区南側調査範囲外に求め、それを中心に複数の単位住居群が展開する絵柄も、想像は許されるだろう。SJ65からは豊富な一括資料がもたらされ、そこには小型丸底鉢が含まれる。被火災住居群を除き SJ65を含むD区住居群は、第2段階にかかる可能性が高い。

北半部の展開は以上だが、引き続き南半部の状況をまとめてみたい。南半部の集落構成で特徴的なのは、B区を中心にA区南辺部にかけて展開する住居群 (SJ 3・24・43・44・49~51・53・54・56) である。中型のA1・2型住居を主体とし、中心軸方向を概ね共有する。すなわち入り口を南東方向にとり整然とした配列をとっている。被火災住居群として分離させた3軒もこの基本構成に含まれるが、SJ48が SJ49 と近接する点を重視し、被火災住居群が時間的に先行するとみなしておく。この住居群の中心的存在は、SJ43・44と推定される。この2軒は、重複するが (SJ44先行) 中心軸を共有しており、ほぼ同じ位置に、規模を拡大しつつ建て替えられたとみられる。この2軒に対応して、住居群が2期に細分される可能性はあるだろう。

なおこれらB区を中心に展開する群については、A 2型住居が目立つ点に当初注目したが、A 2型住居の

意味付けに作業が及ばなかったため、ここでは話題にできなかった。今後を期して再考したい。

A区は、その東半を中心に関構の近接、重複が顕著で、立地からも集落の中心域により近いとみられる。3期以上の変遷が見込まれ、それは第1期(後)から第2期にわたる。具体的な細分案を示さねばならないが、ここでは見合せたい。一部はB区住居群にも関連するだろうが、SJ32・34のように、正方形基調がより明確な住居の配列もあり、また異なる景観が重複しているように見える。

最新段階については、これまで注目されてきた SJ 7 を含め、1977年調査区南部で弧状の配列をとる SJ2・7・10・11がそれにあたると考えたい。脚部径が受部径を大きく上回る器台などを手がかりとした。

以上を通して、第1段階(中)~(後)にあたる現状における最古段階は集落北部に認められ、直後から分布域は南に向けて拡大し、第2段階以前から南北にわたり展開する。最終段階は集落南部に認められる。

付 言

これまで稻荷台集落の展開について雑駁な見通しを述べてみた。当初のもくろみでは、遺構の配列と土器編年の視点から単位住居群を浮かびたたせ、集落展開をより具体的に描き出すはずであった。それに向けて遺構に関するデータは一通り整理したが、土器については、周辺遺跡を見渡した上での視点を用意できなかったため、集落展開の骨組みとなる土器編年案は、ほとんど不発に終わってしまった。このため、集落展開の描写は、ほとんど遺構に引っ張られる内容となり、薬師耕地前遺跡墳墓群との関連についても積み残す結果となってしまった。

またD区出土資料に限っても、袋詰めされた破片資料については実見していないものが多く、詳細な基礎データを整理することなく終わってしまったことは残念である。

土器編年については、書上編年の骨子である3段階

第85図 同時焼失住居の配列



編年による、大宮台地地域の実状を反映させつつ具体像をあたえることを目標としていた。それに関連して2、3付言しておく。

稻荷台遺跡に先行する状況は、吉野原遺跡に認められる。器台、有稜高杯、開脚高杯が組成に加わっている一方、弥生時代以来の大型装飾壺が健在で、また器台SJ4-1は受部に縄文装飾されるという、新旧要素が織り交ざる状況である。吉野原遺跡出土土器群は、大宮台地地域における第1段階（中）以前の標準的資料とみなしうる。

第2段階に関わるが、大宮台地地域において小型丸底鉢の影が意外に薄い状況は、筆者も以前から気に留めていた（古墳時代土器研究会1997）。小型精製土器群の定着は、当地域においては画期的といえるほど明確ではなかったようにみえる。稻荷台遺跡では口縁部有段の小型鉢は見当たらず、小型丸底鉢の確実な例はSJ65-1のみである。そのSJ65-1もつくりは粗雑で精製品とは言い難いことは先述した。地域的な事情

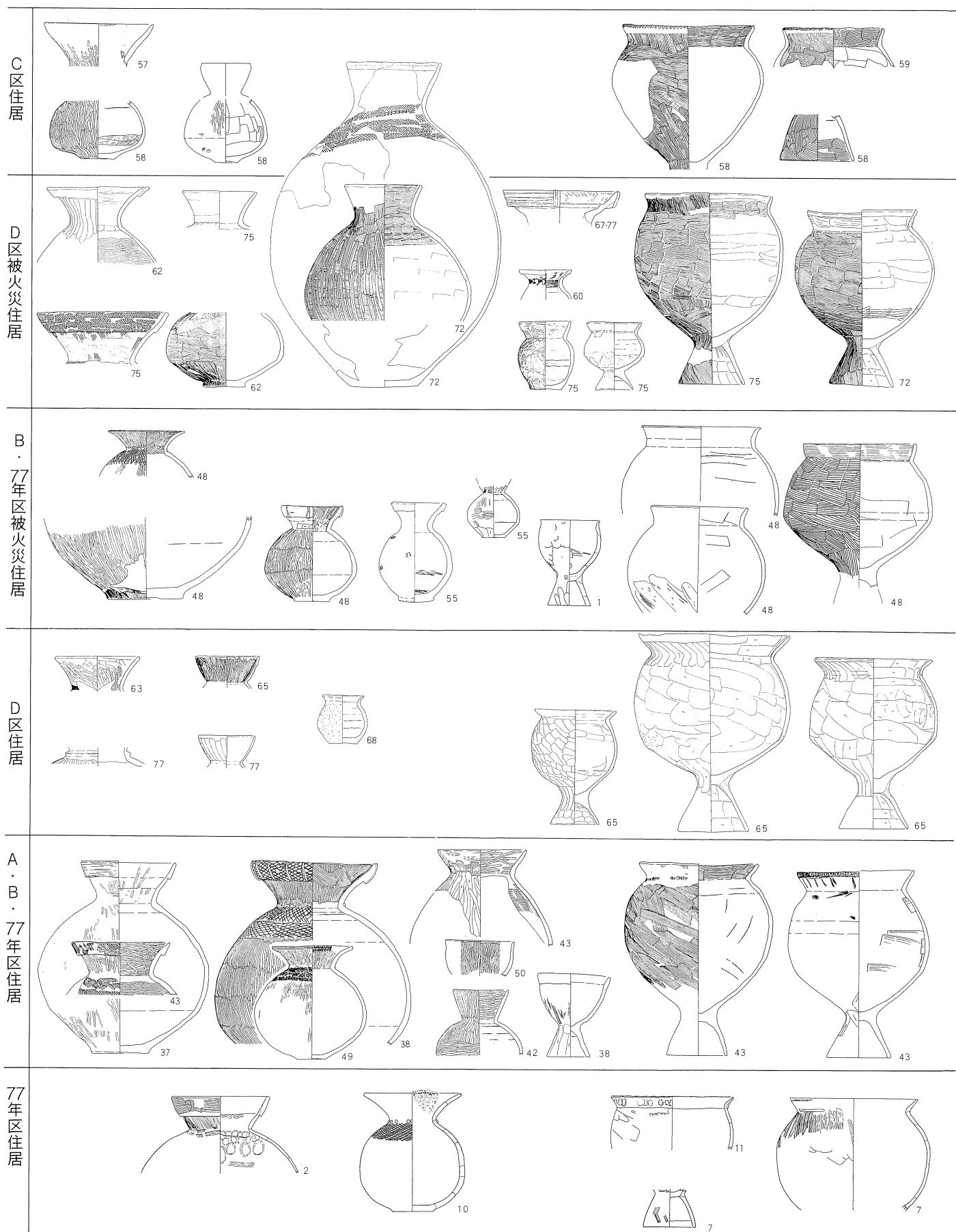
を反映しているとみなされる。集落の主体的時期を第1段階（後）～第2段階としながらも、その枠内での整理が付きかねたことは、第2段階の把握があいまいであることが一因となっている。

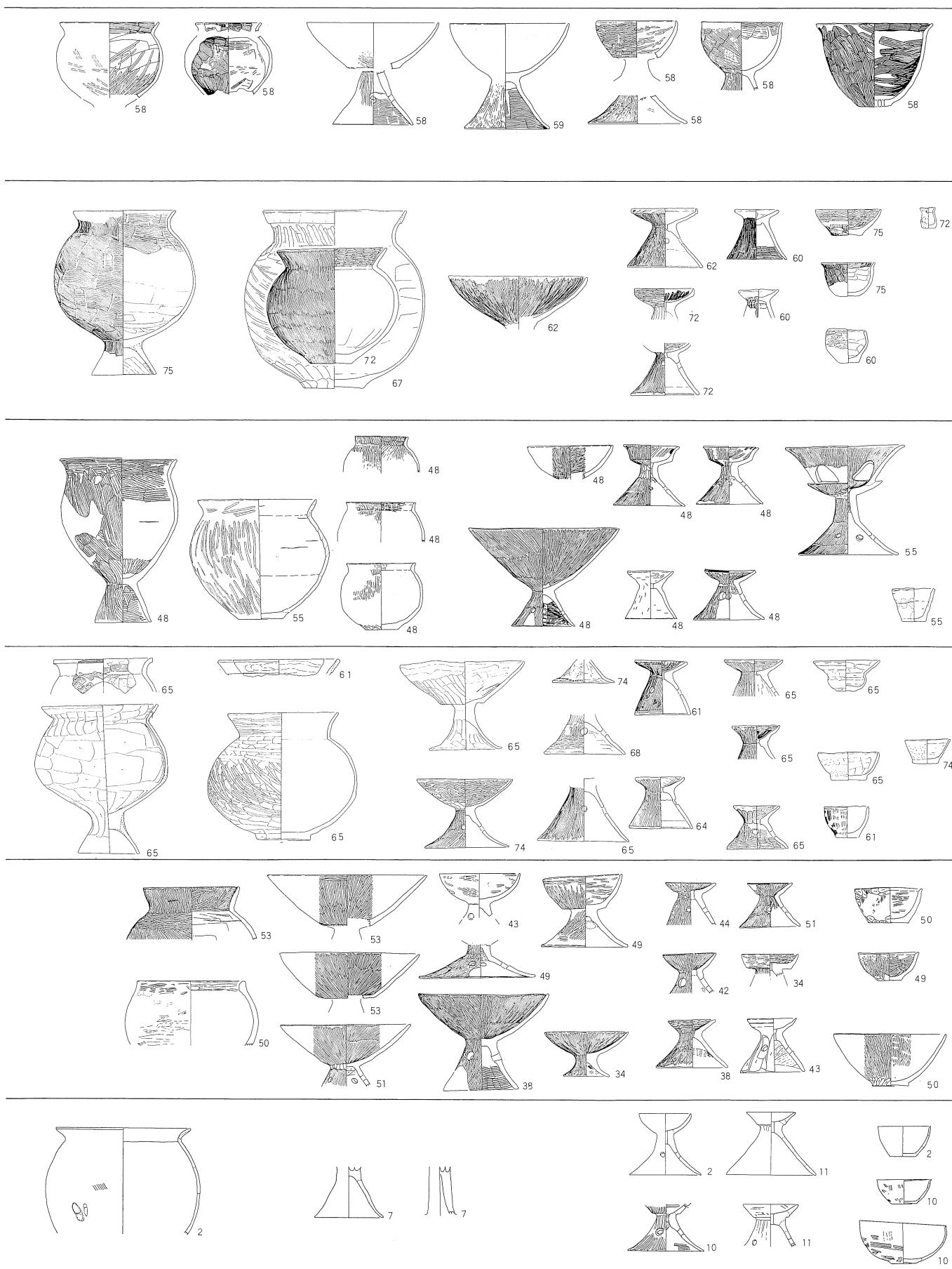
一方、荒川対岸の比企丘陵東部台地地域には、当該時期の標識遺跡である五領集落が出現する。それが小型精製土器群や布留式系甕を伴うことは広く知られているが、対岸地域のそのような状況と対照すれば、大宮台地地域には異なる様式が存在すること、そしてそれらを、五領遺跡を標識とする五領式の概念で理解することは困難であることを、稻荷台遺跡出土土器を通してあらためて認識させられる。

（註1）第79図は、当事業団報告第139集第4・5図をもとに作成した。薬師耕地前遺跡の遺構名称は、当事業団で使用している略号で表記した。すなわち「方形周溝墓」は「S R」となる。

（註2）住居跡の規模については、遺構図の下端で表される、壁溝を含む床面の広さに基づいた。そのため、

第86図 稲荷台集落の土器群





各報告書に掲載された数値より小さい場合が多い。

(註3) 床面積10m²に満たず、しばしば炉も確認されない遺構を住居跡とみなすことには異論もある。そこに通常の住居と性格を異にする施設が多く含まれる可能性は高いだろう。しかし、それらに対し10m²を超える遺構が同一の性格を共有するとは限らない。大型住居の性格が議論の対象となってきたのもその一端を示している。ここでは性格の吟味を見送り、とりあえず大小によらず、人間が活動した屋内空間とみなしうるものを住居として扱う。

(註4) この事例報告がB区の住居に集中することから、当初、弥生時代の伝統的行為を継承する単位集団の存在を思い浮かべた。しかし、調査にあたった書上元博の教示によれば、この遺構を検出するには、意識的な注意を以って臨む必要があるらしい。他の調査区の住居について有無の判断が報告されていない以上、

B区における限定的事例として注目することは危険だろう。なお、古墳時代前期住居における同様な遺構は、八王子市神谷原遺跡でも確認されている。

(註5) 書上分類では、「折返し口縁壺」は器種として独立していない。確かに稻荷台遺跡での存在感は薄いのだが、ここでは弥生土器からの係累を重視し、複合口縁壺とは分けた。複合口縁壺1C類、1D類の一部が相当するだろう。折返し部分幅狭な典型例は1E類SJ55-1があるが、ここでは「小型壺」として、壺とは別種とみなす。

(註6) ここでいう小型壺は、書上分類では壺に含まれる。書上分類「小型壺」は小型丸底土器に類する土器とミニチュア土器を含む。ここでは前者を小型丸底鉢、後者を小型土器として、別類に属させた。

(石坂俊郎)

引用文献

- 赤塚次郎 1990「考察」『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
浅井和宏 1986「〈宮廷式土器〉について」『欠山式土器とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会
石坂俊郎 1993「大宮台地の弥生ムラー集落形態と住居形態の素描—』『史観』第128冊
石坂俊郎 1999「弥生時代後期の遺構、遺物について」『下野田本村遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第255集
加納俊介 1999「古式土師器の構造論的研究序説」『三河考古』第12号
書上元博 1994「VII.発掘調査の成果と課題」『稻荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第139集
古墳時代土器研究会 1997『土器が語る—関東古墳時代の黎明—』
渡井一信・加納俊介 1982「IV 2、3の問題」『月の輪遺跡群III』富士宮市教育委員会
村田健二他 1998「木曾良遺跡の研究(1)」『研究紀要』第14号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
遺跡発掘調査報告書
上尾市教育委員会 1978『薬師耕地前遺跡』上尾市文化財調査報告第4集
上尾市教育委員会 1996『尾山台』上尾市史編さん調査報告書第10集
上尾市稻荷台遺跡調査会 1979『上尾市稻荷台遺跡』
大宮市遺跡調査会 1986『吉野原遺跡・下加南遺跡』大宮市遺跡調査会報告別冊3
大宮市遺跡調査会 1996『三崎台遺跡』大宮市遺跡調査会報告第56集
埼玉県遺跡調査会 1971『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山遺跡・南遺跡発掘調査報告』埼玉県遺跡調査報告第8集
財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983『さら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集
財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994『稻荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第139集
下津谷達男他 1962『野田市三ツ堀遺跡』
庄和町尾ヶ崎遺跡調査会 1984『尾ヶ崎遺跡—縄文・古墳時代集落跡の調査—』